

助成年度：平成4年度

[所属] 京都大学 農学部

[役職] 助教授

[氏名] 大島 誠一 (牧田 邦宏・中島 皇・山中 典和)

[課題]

原生的森林の利用と自然環境への影響

－ 芦生演習林への入り込み実態とその影響－

[内容]

森林の利用には、森林資源利用と森林を維持して利用する環境財利用がある。近年、森林のもつ環境維持機能、都市住民のレクリエーション利用の重要性が求められている。これは、都市から山村までの距離が飛躍的に縮小され、週休二日制度の導入によって余暇時間が増加し、市民は自己の生活スタイルを見直しつつあるためである。

本研究は、森林の環境財としての利用を評価する手段として、市民による原生的森林の利用実態と、利用に伴う自然への影響を調べた。場所としては、ツキノワグマほか多種のほ乳類が生息し、京都市内から自動車で約1.5時間の芦生演習林である。

入り込み調査は、ビデオテープ録画による出入口調査と出入口2ヵ所、分岐点6ヵ所に人を配置した調査である。この際にアンケート調査を3回実施した。演習林の利用は年間約1万5千人が利用し、春(5月)と秋(11月)の連休に多い。利用は主に3コースに集中し、大阪、京都の住民で40-50才世代が多い。利用日数は日帰り利用が半数を占め、宿泊の場合でも2-3泊である。目的はハイキングが半数以上で、動植物観察の割合が高い。利用者数は天候にあまり関係ない結果となっていた。

林道の造成、入り込み等によって演習林に自生しない植物の侵入が見られ、外来産植物は18種が数えられた。靴やタイヤの泥と共に侵入し踏み跡群落を形成するオオバコは全ての林道、軌道敷きと入り込み者の多い歩道に見られ、すでに氾濫によって攪乱を受ける河原植生の一員となっていた。昨年夏から1年間にクマと遭遇した情報は11件あり、3例はかなり危険な状態であった。一人での入林は出会う機会が多くなるが、入り込みが野生生物に与える影響は少ない。入り込みの増加は、ゲートや鍵の破壊など、森林管理者のトラブル増加につながる。また、稀少植物種の減少、釣り資源の枯渇に伴う他品種のアマゴの放流による現生種の汚染などが心配された。以上の問題点を考慮し、今後は森林管理上の対策が問題となる。